戦時中の国民学校に勤務して

倉岡　キヤウ
若宮二丁目

第二次世界大戦中、中野区野方に住み、区内の国民学校に在勤していました。学童疎開には付いて行かず、残留児童の教育、校舎の防護、疎開地との連絡及び父母との面談、区との連絡等に当たりました。二〇年七、八月頃は職員も二、三名となり、空襲が落着いてからは、焼失校の整理や焼け跡地の屑片付などにも従事しました。

十九年のはじめ頃には一日、十五日に武運長久、必勝祈願をこめ、児童全員で沼袋の氷川神社に参拝に行っていました。四月頃からは、学童の健康のために給食が開始され、校舎の脇にしつらえた大釜で、炊さん隊の方々がご飯と味噌汁を作って下さいました。食糧難の時ですから、給食といっても現在のようにバランスのよい給食とは比較にならず、空腹を満たすだけのものでした。間もなくそれもなくなり、コッペパンが一人一個ずつ割り当てられて大喜びでした。当時は区からの連絡で雨合羽、運動靴、焼き芋などの配給券も各学級に数枚ずつ配っていましたが、なかなか行き渡らずどうにもなりませんでした。

戦局は一変して食糧不足は更にひどく、本土決戦が言われるようになって、八月末には学童集団疎開が始まりました。大半の児童は福島県の東海岸江名、小名浜、湯本白鳥方面に疎開し、学年によって行き先は分かれました。縁故疎開も多くなって残留児童は二五〇名位になり、職員は十余名となって教科の指導及び疎開地との連絡、学校の守護等に当たっていました。だんだん空襲警報が頻繁になり、三月には福島県に二百余名の第二次集団疎開が実施されました。

五月のある晩には四方から火の手があがり、近くは西に都立家政方面、南は高円寺、東は新井薬師・新宿方面、北は豊島区池袋の方向と空の明るさは無気味で異様でした。空からは絶えずB29の轟（ごう）音が鳴り響き、今度は自分の頭上かと恐れながらも、大火に至らないよう消火に努めようと思っていたものです。物資欠乏のため日中でも戸の締まっている商店が増え、警報のサイレンだけが鳴り渡るようになりました。

疎開地先の福島県では、太平洋沿岸地は艦砲射撃や空襲で危

うくなり、会津若松の奥の柳津、西方、宮下方面に全員再疎開の移動が行われました。

その間、私も疎開地を訪ねる機会があって、各学年の宿舎を見回りました。田舎の不自由な生活にも少しは馴れて元気な顔で安心しましたが、家に帰りたい気持ちをがまんしている様子がうなづけてつらい思いでした。一緒に入浴して背中を流したり低学年の髪洗いを手伝ったりいたしました。食卓に並んだ丼には、漬物と梅干しがのっていました。おなかが空いてたまらない年頃なので、松ボックリの実や、面会の親が持って来た砂糖を大事に味わったということです。子ども達が先生といっしょに通っている地元の学校にも行きました。教室の廊下側は障子戸のところもあり、素朴なたたずまいでした。勉強のあとは入浴のため薪運びや草取り、雑巾がけなどよく働いていました。

疎開先の先生方や寮母さん達は、日夜児童のお世話で心労も多かったようです。子ども達の健康を深く考えられ、食糧集めにも奔走されて、東京の両親に心配をかけまいと一心に見守っておられました。

次に、集団疎開最後の引率の時ですが、情勢はいよいよ急を告げ、二〇年六月末頃でしたか、小学二年生を含めた約三〇名を連れて福島県へ出発しました。朝早く中野駅から上野へ、そしてみんなの疎開地宮下へと向かいました。引率はうら若い新任の女教員と私の二名です。中野駅で見送りの両親と別れ、上野までは父兄一名が付添って下さいました。当時は乗車規制があり、列車の切符を求めることはとても困難でした。東北本線に乗車し、東京の空襲から逃れてほっとしましたが、宇都宮近くで空襲警報のため停車となり立ち往生した時は、親元から遠く離れた所で被害を受けることになったらどうしようかと、胸の高なりを感じ心配でした。このあどけない子ども達を何としてでも守らなければと、神に祈る気持ちでいっぱいでした。送り出した父母の方々は女教師二人だけに任せて、ただひたすらに無事を願う気持ちではなかったかと思います。途中、郡山で乗換え、会津若松から柳津、西方を経てやっと目的地宮下駅に着いて、先生方や大勢の児童に出迎えられた時は、すっと肩の荷がおりました。子ども達はそれぞれの部屋に分かれ、友達と一緒になって明るさを取り戻したのでした。

学校に残留した教員は七月半ばからはごく少なくなり、やがて女教員だけの宿直が続くようになって、学校で朝、昼、晩の炊事をするようになり、飯ごうですいとんを作ったり、防空壕の土に生えた野草を汁の実にしたりしました。夜は、枕元に靴や懐中電燈を置き、ラジオに耳を傾けていました。空襲警報におびえながらも、学籍簿を入れてある非常持出袋を背負って校庭の防空壕に入ったり出たりしました。生きた心地のしない緊張感に包まれていましたが、学区域内の被害は少なく、爆弾は投下されましたが不発弾が多く、燃えても小範囲で済み大火に

至らなかったのが幸いでした。

区内では、被害を受けた地域も多く、空襲が落着いてからは焼失校跡の中野神明小学校にもまいりました。学校は跡形もなく焼野原で、右手にプール、左手奥に奉安所の跡らしい石造りの台が残り、ピアノ線はからみあい、ピアノがあった位置を彷彿させました。校庭には一面に数多くの焼夷弾が刺さった跡が斜めに残り、空襲の凄まじさを物語っていました。空襲の被害の夜、宿直だった女の先生はプールに入って助かったそうです。

また、区からの連絡で神田辺(あたり)にも焼跡整理に出掛け、汗と埃にまみれました。浅草墨田区辺の一帯は見渡す限り広々として見るかげもなく、悲惨な様子が目に焼付いていて今でも夢にあらわれます。

疎開していた子ども達は、今では五五歳を過ぎ、社会人として活躍中です。なお、地元の多くの方の温情は有りがたく忘れ難いものが多くあり、その後四〇年近く経って懐かしい疎開地への訪問が叶い、涙ながらの再会があちこちで聞かれました。

失った数多くの尊い命を思い、傷付いた人々の痛手に涙し、焼失家屋を目の当たりにしたあの当時を思い浮かべますと、感無量でたまりません。

終戦から四六年、戦後の復興の目ざましさは素晴しく、物質は豊富になりました。夢のような気がします。

今を生きる子ども達の元気に登校して行く姿をみると、あのような生活が二度と訪れないことを願い、平和を祈る気持ちでいっぱいです。